

技術教育研究会と私の歩み

16

佐々木 享

高校の学校史・記念誌の収集

もう少し専修大学時代の教育実践の話が続ける。ゼミ生から日本資本主義発達史関係の業績はほとんどないというなら先生の専門は何かと尋ねられ、近代日本の技術教育や職業教育・訓練の歴史を研究していると答えるはめになった。それならこのゼミで何かできることはないかというので、かねてから全国の高等学校の沿革史や創立〇〇年史なるものを収集してみたい旨の話をしたところ、やりましょうということになった。

途中経過を省くが、全国すべての高等学校に往復葉書で、学校沿革史や記念誌の編纂の有無を尋ね、譲って頂けるものはお譲り下さるよう、また有償の物は購入したいとお願いしたのである。他方で国会図書館や野間教育研究所のこの方面の書物の収蔵状況も調査した。その上で面倒な手続きを踏んで目録が作成された。これらのすべては、ゼミ生の無償労働で進められた。

実を言えば、こういう作業を始めることにはかなり勇気が要る。途中で止めてしまったらあまり意味がない、収集したものの収納場所を考えなくてはならない等々。これらすべてはゼミ生の熱意に押し切られて始まった。結論だけ言えば、この仕事は名古屋大学時代も続き、名大退職に際して、それまで収集された約1700冊という自分でいうのも妙だが日本有数の高校史関係のコレクションを名大図書室で引き取って頂くことでようやく落着し

た。(拙稿「高等学校の沿革史・記念誌の所蔵目録について」『中等教育史研究』第7号、1999年4月、を参照。) 考えみれば、この種の資料は元来は図書館などの公的な研究施設で系統的に収集すべきものであるが、それがないところに日本の教育研究の貧しきないし弱点が露呈しているというほかない。

楽しかったゼミ合宿

私自身は、時代が貧しかったからか、貧しい夜学生だったからか経験がなかったので、年に1回の2泊3日ないし3泊4日のゼミ合宿は楽しかった。大抵は、伊豆大島、箱根、千葉の白浜などの大学のセミナーハウスを利用したが、河口湖、軽井沢などにも出掛けた。日程の真ん中にレクリエーションを組み込むのだが、たちまち街で出会った若い女性と友達になって連れて来る。こういうことはほとんど天才的な才覚ではないかとしばしば驚嘆した。しかしゼミのコンパというものはなかったように記憶する。

私がスポーツをほとんどしないことを知って、ある冬に越後湯沢まで無理矢理スキーに連れ出されたこともあった。初めてだったのに、その楽しかったことは忘れられない。

私の教育学の講義ことはじめ

ところで私は大学の非常勤講師という仕事を好きではなかった。大学を卒業して初めて

勤めた目黒区立第六中学校の同僚の豊田薫氏から、大学の非常勤講師を名誉なことと思って喜んで引き受ける人がいるが、そのために費やす時間があつたら勉強して論文を書いた方がいいと言われたことがある。妙なことを言う人だなと思ったが、この言葉は忘れられないので、喜んで引き受けたことはない。しかし浮き世の義理と人情などやむを得ない事情で断り切れないこともある。たとえば神奈川大学の「技術論」の講義を1969年から71まで続けたのは、東京工大の山崎俊雄先生を通して強く依頼されてのことだった。

そんな私が行った教育学関係の初めての講義は、秋田大学教育学部における1968年夏の集中講義で、科目は技術科教育法だった。その頃、日教組の教育研究全国集会の技術・職業教育分科会で助言者としてご一緒した佐藤裕二氏からのお誘いだった。教職員組合などの教育研究の場では学習指導要領について批判的な意見を述べることは多かったが、学生さん相手では単なる批判では済まない。技術科教育の在り方を積極的に語ることが求められるから、この講義は、技術科教育についての私の考えをまとめる絶好の機会に思われた。その意味でこの講義は、やむを得ずに引き受けたというより楽しい授業で、自分でも力が入っていたと記憶する。私のこの集中講義は、その後1971、1973、1975、1977、1979、1981年と名古屋大学赴任後も続けられた。

活動計画の討議

1970年に私が事務局長になってからは、技術教育研究会の規約を整備しただけでなく、研究会の基本的な活動の長期的な目標を「活動方針」として掲げることとした。これは、私たちのたんなる日常的な活動の目標ではなく、役所の仕事としては各省庁や部局の所管により分断されている日本の技術教育や職業教育・訓練に関して、研究すべき基本的な課題を統

一的に定式化する意味合いをふくんでいる。『会報』には大会特集号など折に触れて掲載しているが、雑誌『技術教育研究』には必ず掲載するようにしている。

これとは別に、毎年の大会にはその年の活動の「経過報告」を提出するとともに、翌年度の「活動計画(案)」を提示して大会で承認を受けるようにした。長期的な目標と年度計画を区別する方式は、私が1960年代から参加している教育研究会(教科研)の方式になつたものである。この方式は、近年ほぼ定着している常任委員会の最も重要なしごとの一つになっている。1年間の経過報告をまとめることで活動の実際を点検することができるし、やり残した問題を確認できる利点がある。

しかしもっと重要なことは、「活動計画」を策定するについては、私たちが当面している情勢の本質的な特徴をお互いに確認し、技教研広くは技術教育・職業教育の研究や実践上の課題を提示する必要が自覚されるに至つたことである。そのため、この「活動計画」の策定は、常任委員会の最も重要な仕事となり、またそのために原案を提示することは事務局長の最も重いしごととなった。「重要だ」とか「重い」というけれども、この討議は、自分たちが日本の技術教育・職業教育に一定の責任を果たしていることを実感できるという意味では、最も充実した時間である、ともいえる。

技教研の総会は毎年夏の大会のぎつしり詰め込まれた日程の中で開催される。その中でこの「活動計画」を審議する時間は極めて限られているが、必ず重要な議論がある。

ところが今回この「歩み」を執筆するにあたって『会報』のバックナンバーを改めて調べてみたら、「活動計画(案)」を大会に提案し、大会での討議を経て成文化したものを『会報』に掲載する方式が確実に定着したのは、私の事務局長時代ではなく、河野義顕氏に代わってからであったことが分かつた。同氏の着実なしごとぶりがここにも遺されている。

(つづく)